小学校教師が重視する「教員の資質能力」についての考察
―予備調査をもとにした聞き取り調査から―

Some Consideration on the Expected Competence and Ability of Teachers by Elementary School Teachers
- Study of Current Interview Based on the Primary Survey-

進藤正洋*　成田信子*　吉田武大*　中尾繁樹*　板良敷敏*　濱名陽子*
Masahiro SHINDO　Nobuko NARITA　Takehiro YOSHIDA　Shigeki NAKAO　Satoshi ITARASHIKI　Yoko HAMANA

抄　録

本学教育総合研究所の教員資質に関する研究プロジェクトでは，2007 年度に幼稚園と小学校を対象に予備調査を行った。その結果についてさらに深く分析するため，2008 年度には，教師，保護者，地域住民を対象に聞き取り調査を行うことにした。

本稿では，小学校教師が重視している３つの資質能力に絞って，教師，保護者，地域住民から聞き取り調査をした結果とその考察を述べる。

１．はじめに

本学では，2005 年度に人間学部人間行動学科こども学専攻が開設され，保育士資格，幼稚園教諭免許の取得が可能になり，翌年の学科再編によって小学校教諭免許も取得ができるようになった。さらに 2007 年度には学部名の変更があり，教育学部教育福祉学科こども学専攻となって，設置目的に「教育保育に関わる人材養成をすること」が明示され，初等教育教員や保育士の養成をめざす立場がより明確にされた。

そして，2007 年度から，本学のこども学専攻教員を中心に初等教育教員の資質能力についての研究プロジェクトがスタートし，文献研究とともに，大学近辺の小学校と幼稚園の教師，保護者を対象とした質問紙調査(予備調査)を行ってきた。これは，教員や保育士の養成をめざす大学において，学生にどのような資質能力を重視した教育を行い，専門家としての人材の育成をするのか，その基礎研究のためである。

ここでは，予備調査[1)] で明らかになった「教員の資質能力」から，教師が重視しているにもかかわらず，保護者の必要感はそれほどでもない「自らの資質や能力を高めようとすること」「保護者とのコミュニケーションがとれること」「子どものしつけができること」の３つについて，教師，保護者，地域住民の視点やその背景がどこにあるのかを聞き取り，その結果を分析，考察する。

＊関西国際大学教育学部　　教育総合研究所学内研究員

２．予備調査結果と聞き取り調査計画

⑴ 予備調査結果について

予備調査結果は，本学の教育総合研究叢書第１号にまとめられているが，そのうち，調査 34 項目の教員資質能力について教師と保護者がそれぞれどれだけの必要性を感じているかを一覧表にしたものが表１である。

前述した予備調査の結果は本学教育総合研究所の「教育総合研究叢書」第１号ですでに報告しているところである。そのなかで，34 項目の「教員の資質能力」について，調査した小学校（神戸市と三木市，それぞれ１校ずつ）における教師と保護者が，それぞれの項目についてどの程度の必要性を感じているのかを比率で表したのが表１である。このなかで小学校教員に必要とされる資質能力について，教師の回答と保護者の回答の上位３項目までを示すと，次のとおりである。

＜教師が重視する資質能力＞

第１位「嘘やいじめに対して毅然とした態度を取る」　(87%)

第２位「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」　(78%)

第３位「自らの資質や能力を高めようとする」　(76%)

＜保護者が重視する資質能力＞

第１位「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」　(83%)

第２位「子ども一人ひとりの個性を大切にする」　(81%)

第３位「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」(78%)

また，アンケート調査の結果をみると，小学校教員に関係が深いと想定できる34の資質能力のなかで，必要［「ぜひ必要」と「どちらかといえば必要」）とされるものについて，とくに「自らの資質や能力を高めようとする」「保護者とのコミュニケーションが取れる」「子どものしつけができる」の３つに教師と保護者のおおきな差が見られ，教師の回答に比し，保護者はその資質や能力をそれほど重視していないという結果が明らかになった。このなかには，教師も保護者も，ともに重視している「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」資質能力もあるが，必要と考える割合が異なる項目が多くあり，教師自身が考える資質能力と保護者が求めている資質能力には，かなりのちがいがあることを示している。

⑵ 聞き取り調査の計画について

予備調査として，ステークホルダーを重視する視点から教師と保護者へのアンケートを中心に調査を実施してきた。そして，小学校教員に求められる資質能力について，その調査結果を分析していく過程で，教師と保護者による意識の違いが明らかになってきた。

来年度に予定している本調査に向けて，予備調査の結果が十分に活用できるものでなければなら

ない。そのため，質問司法による調査結果を十分に分析し，さらにデータの整理や明らかになった問題点についてその背景等をできるだけ究明をしておく必要がある。

そこで，なぜ，このような意識のズレが生じているのか，今日的な教育課題にもつながっている教育現場の底辺にあるものを明らかにし，さらに詳細な検討を加える必要があるとの立場から，あらためて面接調査を実施することになった。その目的は，教師と保護者の認識のずれの要因を探るとともに，本調査に向けての質問項目の再検討等を行うことにある。

具体的には，とくに今回の予備調査で明らかになった教師と保護者の意識の差についてその背景にあるものを探るため，予備調査を実施した２小学校に再び協力をお願いすることにして，聞き取り調査を行う目的や内容，方法を検討し，前回には対象にしなかった地域住民も含めて聞き取り調査を行うことにした。調査に当たっては，対象者の選定，聞き取り方法や記録，プライバシーへの配慮などの多くの課題があるが，プロジェクトで検討を重ね，質問紙では把握できなかったことについて調査できるよう，次のような調査計画を策定した。

＜調査対象＞　アンケート調査を実施した２小学校（神戸市立Ａ小学校，三木市立Ｂ小学校）の教師と保護者，同校区の住民の方（教員：年齢構成に配慮　保護者：ＰＴＡ役員，地域住民：校区の各種団体役員など，各４～５名程度　・・・　校長に推薦を依頼）

＜調査方法＞　教師，保護者，地域住民のそれぞれのグループについて，別々に訪問面接を行い，聞き取りによる調査を実施する。（2008 年 12 月～1 月を予定）

・面接調査者は２名，時間は 60 分程度（話しやすい雰囲気づくり）

・教師からの聞き取りは，20 代と 40 代，30 代と 50 代のペアの 2 組に分けて別々に調査し，経験差（年齢差）もできるだけ把握できるようにする。

・質問者は事前打ち合わせを行い，共通の質問内容を踏まえて，各グループの必要な回答ができるだけ自然な形で把握できるように，聞き取りの進め方の工夫をする。

＜調査内容＞　次の①～③に示した各項目の異なる立場による受け止め方のちがい等について，それぞれの感想や意見をグループ別に聞き取り調査を行う。また，関連して話題になった資質能力についても聴取，記録する。

① 教師の多く（約 70%以上）が必要性を感じているが，保護者との差が顕著なもの

項目　3「自らの資質や能力を高めようとする」

項目 13「保護者とのコミュニケーションがとれる」

項目 18「子どものしつけができる」

② 保護者の多く（約 70%以上）が必要性を感じているが，教員との差が顕著なもの

項目　8「子どもの模範となる言動ができる」

項目 12「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」

項目 22「子どもの心のケア・教育相談ができる」

③ 学習指導要領に新たに導入されているが，教員も保護者も共に関心が低いもの

項目 33「国際社会で通用する語学力」

表１　「教員の資質能力」について教師と保護者が必要性を感じている割合（%）

N	教	保護	差	ランク	教員資質能力の項目
1	***73***	***72***	1		子どもをひきつける表現力がある
2	60	50	10		誰とでも協力できる
3	***76***	52	24	***3***	**自らの資質や能力を高めようとする**
4	46	46	-1		幅広い教養を持っている
5	44	44	0		自分自身が夢を抱いている
6	***87***	***75***	12	6	**嘘やいじめに対して毅然とした態度を取る**
7	44	52	-8		あこがれの対しようとなるような人間的魅力にあふれ
8	55	69	-15	-1	子どもの模範となるような言動ができる
9	49	39	10		得意分野を持っている
10	69	***81***	-12	***-5***	子ども一人ひとりの個性を大切にする
11	***71***	***77***	-6		子どもが好きである
12	66	***78***	-13	***-4***	子どもの目線に立ってコミュニケーションができる
13	***73***	47	26	***2***	保護者とのコミュニケーションがとれる
14	53	30	23	4	同僚とのコミュニケーションがとれる
15	51	64	-13	-3	教科内容の知識が豊富である。
16	***78***	***83***	-5		**子どもの関心を引き出しながら授業ができる**
17	69	63	6		授業技術が身に付いている
18	***73***	44	29	***1***	子どものしつけができる
21	35	37	-3		子どもの成長・発達に関する専門知識が豊富である
22	53	67	-14	-2	子どもの心のケア・教育相談ができる
23	69	***75***	-6		子どもの評価が公正・的確である
24	56	59	-3		子どもの失敗をおおらかに受け止められる
25	36	37	-1		考えたことを実行できる
26	31	13	18	5	情報機器が活用できる
27	67	67	0		教師としての使命感，情熱，意欲を持っている
28	46	36	10		社会の一員として世の中の変化に敏感である
29	66	66	-1		社会的な規範を守る
30	62	65	-3		多様な考え方・見方を受け入れられる
31	29	35	-6		社会に貢献しようと言う意識が高い
32	29	23	6		地域の実情について深く理解している
33	26	26	-1		地球的規模の問題への関心がある
34	13	9	4		国際社会で通用する語学力

※　太斜体字は，70%以上の指示があるもののうち，差が大きいもの　　(数値は四捨五入した整数値)

３．結果と考察

（1）　自ら資質や能力を高めようとすること

①　教師による視点

「自らの資質や能力を高めようとする」ことが，小学校教師の資質能力として必要であるという回答は，教師76.4%に対して保護者52%であった。この差は，24.4%となっており，開きの大きい項目の一つである。

面談に応じてくれた30代と50代の教師からこの結果について話を聞いた。そこでは，中堅，ベテランと言われる年代の教師にとって教育機器や英語活動，総合的な学習など新しい教育内容や指導法に対応するにはそれまでの経験をそのまま保持して済むことはなく，自らの資質や能力を高め，磨くことは当然の課題と認識している。特に50代の教師にとっては切実な問題と理解できる。

他方で，30代の教師からは個人的経験とは言え，「教師の研修を保護者が認めてくれない」といった発言があった。保護者からすると“先生は楽でいいね”“子どもをしっかり見てほしい”といっているように聞こえると言う。このことは，個人的な教師と保護者の問題ではなく，保護者や社会（マスメディア）が教師の仕事，教育の質的な向上に必要な研究・研修（資質や能力の研鑽）に対する理解力不足と見られ，教職もまた他の一般的な事務職や労働職と同じ仕事と理解されている。保護者からすると“知識”を切り売りする教職と“土地”を切り売りする仕事は同じと理解しているのかもしれない。

教師の資質や能力の向上に限らずいかなる職業・職種においても，専門的な資質や能力を向上させる意欲と組織的な実践力が求められる。

保護者には「資質能力」という馴染みの薄い言葉によって差が出たと考えられるという発言があった。「指導力」としたらどうかという意見である。特に「資質」がもつ言葉の意味が保護者に警戒的にとらえられたのではないかという発言もあった。

②　保護者による視点

保護者の意見は，およそ以下のようになっている。「自らの資質や能力」の内容が問題にされ，保護者からは「個性を大切にする」「心のケア」などの項目がむしろ大事だと指摘されている。この項目は保護者にとっては，№．４の「幅広い教養」とそんなに数値が変わらない結果となっている。保護者は子どもを理解することに関わって，教師が資質や能力を高めてほしいと願っていることがうかがわれる。また一方で，教師自身の能力について，漢字等の間違いを放っておかないことやきちんとコメントをしてノート等を返却することなどきめ細かい子どもへの対応が求められ，保護者の厳しい視線があることがわかる。

・数字的に言うと，みずからの資質や能力を高めようとするという意欲はすごく高いけど，実際，具体的に子ども一人一人の個性を大切にするとか，心のケアができるというの，先生方の数字としては低いですよね。だから，これは自らの資質や能力というのは，先生方は何を指して言ってるのかというのがすごく親としては疑問だったりして，保護者側が先生に望むものと，先生が望むものがここで食い違ってるんじゃないかと思うんですけど。保護者はというか，私が小学校の先生に資質や能力というものとしては，子どもを理解してもらうとか，子どもの日常生活をケアしてもらうとか，そういうことを望んでるんだけど，先生はそうじゃないということですね。これは教育というか，勉強とかそういう内容を高めようとしてるということに見えるんですけど，ここら辺が，学力を伸ばそうとか，そういう力を高めようとするという内容なのかなと思って，ちょっと今見てたんですけど。

・厳しくなくとも，普通のことを教えて，漢字一文字教えていただくというのがいいかなと。

③　地域の人からの視点

教師が自らの資質や能力を高めることについては，地域の人々から次のような要望が出されている。

・教師が自らの資質や能力を具体的にどのように高めようとしているのかが全然見えてこない。また，それを検証する手だてもない。努力している教師も多くいると思うが，例えば，生徒から慕われるようになったということを以て資質や能力が高まったことを検証するような体制が整備されていないことが一番問題である。

・教師は，民間企業で1～2年間，給料をもらいながら働いて，社会勉強をすべきである。

・教師には，子どもの隠れた資質をさらに伸ばしてあげられるような資質や能力を高めてほしい。それから，児童生徒にとって興味のある授業を展開できるような資質や能力も高めてほしい。

これらの要望をみていくと，教師に社会勉強を求める意見，子どもの隠れた資質を引き出すことを求める意見に加え，資質や能力がどの程度高まったのかといった基準を設定することが必要であるとの意見もあった。

一方で，教師の能力は元来高いので，わざわざ資質や能力を高める必要はないのではないかといった，教師に全幅の信頼を寄せた意見もみられた。

・教師には既に高い能力があると私は思っているので，教師の意欲が高いか低いかといったことは問題にする必要がないと思う。

このほか，資質や能力を高めることの前提条件として，教師の多忙を問題視し，時間的なゆとりが必要だとの意見も見られる。

・「授業を終えた後も教師に仕事がたくさんあるのはなぜだろう」と私の孫は話していた。このように，資質や能力を高めるための時間的なゆとりを教師に与えることも必要なのではないだろうか。

（2）　保護者とのコミュニケーションが取れること

①　教師による視点

次に「保護者とのコミュニケーションがとれる」については，必要だとする回答が教師72.7%，保護者46.5%その差は，26.2%であった。

教師にとって保護者とのコミュニケーションは，大切だとする認識で一致している。このような結果についてある教師は，保護者が教師をあてにしていないことによると解説してくれた。下手をしたら教師は文句の対象になる。また，別の教師は，保護者にもかつてのPTA活動のような関係はなく話しづらい人もいるといことである。これまでの保護者と異なり，「ありがとうございました」とか「ご苦労様でした」とかいった言葉や挨拶が無くなってきた，修学旅行の解散時の感謝の言葉や教師が出した暑中見舞い，年賀状の返事が無い，などのエピソードが語られた。

以上，教師は保護者とのコミュニケーションは大事だとする立場から，保護者自身のコミュニケーション能力についての問題点の指摘がかなりあった。

②　保護者による視点

この項目について保護者の意見はかなり多く出されている。教師からの連絡についてはその回数が多くとも少なくとも，保護者には教師側からの伝達と受け止められている。したがって保護者が相談したいことについて交流する機会を学校が提供しているという認識が薄い。教員が宿題等を通じて保護者に子どもの教育に関与を求めるかたちには，批判もあった。教師の多忙さや１クラスの人数の多さがコミュニケーションを阻害しているという意見も出され，学校の現状は保護者側が望んでいる相談に応じられる体制になっていないことがわかる。教師が保護者とのコミュニケーションを高い数値で挙げているにもかかわらず，日常的に教師に言うか言うまいか悩んでいる保護者の姿が浮き彫りになってくる。保護者も教師とのコミュニケーションがうまくいったときは子供が伸びるという意識はもっている。肯定的なコメントについて触れた発言もあった。

コミュニケーションが一方通行だという意見に表れているように，もっと相互交流が必要だということだろう。これだけ保護者にも断絶感があるということは，コミュニケーションという漠然とした聞き方ではなく，保護者と話をする等の直接的な設問の工夫により，数値は変わる可能性がある。

・保護者とのコミュニケーションがとれるというところも，すごい先生はパーセンテージが高いんだけど，今まで学校にずっと通ってて，それを余り意識したことがないというか，先生側から余りアプローチをしていただくことがなくて，どっちかというと，学校であった事象を子どもから聞いて，親がちょっとおかしいなと思ったことを連絡帳で書いたり，直接学校にお知らせしたりして，そこでやっと回答がいただけるということの方が多かったので，ここを先生方が意識しておられるというのも，ちょっと私はびっくりです。

・この数字を見て，ああこんなにしつこく電話がかかってくるのはこういうことかと，ちょっと逆に

納得しましたけどね。しょうもないことで電話かかってくるんですよね。こんな大したこと，ちょっとすりむいて転んだとか，ちょっとこんなことを言ったとか，そういうことをコミュニケーションとしてるんなら，それは親は求めてないので，もう今まで学校で解決してたようなことが，一々一々保護者の方に言ってこられてもなというのはあるんですけど，そのコミュニケーションの内容がちょっとよくわからないんですよね。

・そのコミュニケーションを，保護者からはアプローチしたいことがあるんですけど，日本って一クラス30何人とか40人でしょう。これはやっぱり，これはここで多分余り関係あることかわからないんですけど，多いですよね，かなり。だから，先生はその子一人一人見られてるかといったら，それを求めるのはかわいそうなぐらい一クラスの人数が多くて，うちはアメリカに家族いますけれども，一クラス大体20人ぐらいでエイドがつくんですよね，３人。ボランティアの方と副担任と。だから大体２人でその人数見る，ほかの国もどうもそんな感じらしいから，やっぱりそれは無理があるのかなと思ったりとかというのは感じますよね。だから，そういうシステムができればいいのにと，１年生で入ったときからずっと思ってましたけど。補助をしてもらってという。

だから，そこで言いたいことがあっても，本当に先生が手いっぱいで９時，10時まで毎日残業されていて，丸つけも十分にしてもらわずに帰ってくるから，子供は何が間違ってるかもわからないという状態で帰ってくるので，それ以上の相談はもちろんすることはできないし，先生方も，もしかしたらそれでいっぱいいっぱいだと感じてらっしゃるかもしれないと思ったりします。

・いっぱいいっぱいというと，昔はそうだったかどうか知らないんですけど，割と最近は親に何か丸をつけていてくださいとか，ちゃんと宿題を見て評価をしてから出させてくださいみたいなところが，ちょっと私，いや，ここ最近は，その以前はよく知らないんですけど，何か最近は余り学校がお忙しいからなのかどうかは知らないんですけど，割とそういうことが多いかなと思うんです。今は私在宅してるから大丈夫なんですけど，以前はフルタイムの仕事を，夜勤もしてたのでなかなかそこまで手が回らなくて，結局そういったことになると子どもが見てもらえなかった。先生に言ったら，何も見てもらってないプリントを見せたりするようなことになると，ちょっとその子は，今の言ったら家庭状況ってそういうのがざらにあると思うんですけど，すべてちょっと家庭にそこまで求められると困るかなと思うことがちょっと多いかなと思います。

・コミュニケーションが一方通行なんですよね。先生方から言うことはがっと言って，それに対しての望むものが保護者と先生が違うので，保護者にこういうことをしてもらいたいということと，保護者が先生にこういうことをしてほしいということが多分別々だから，こういう結果が出るんだと思うんです。その子供一人一人の個性を大切にするというのが，保護者のすごい大役ですよね。今言われてたような，その個人のことがよく理解できてないという，それぞれの個性を生かしと言うと，先生方は意外にわかってくれてて，うちの子こんなこと言うたって，こんな子だからというふうにまあまあで終わってたようなことも，一々細かく細かく言ってこられたり。そうかと思ったら，違うこと，親が言ってること，親が望んでることになかなか気がついてもらえなかったりとか，親が言いたくても我慢してることをなかなか聞いてくれなかったりとかすることはよくありますけどね。周りでも先

生に言おうか言わまいかと悩んでる人がいるかと思えば，私のところみたいに，もう必要以上に連絡が来たりとかすることもあるし，そこら辺の望むものがお互いがわからないからコミュニケーション，その時点でもうコミュニケーションが断裂しているのか，とれていないんじゃないかと思うんですけど。

・お互いが歩み寄れないですよね。保護者と先生が話しする機会というのがなかなかないですよね。多分，私もちょっと今は学校に来る機会が多いから，先生とも顔なじみになって，ちょっと話をしたりとかすることはありますけど，本当に一番上の子が小学校低学年のときなんかは，もう先生と話しすることなんて全くなかったし，どう声かけていいか，何を言うかって，結構ためてるお母さんはいっぱいいらっしゃるので。連絡ノートに書いて言おうかということ自体で，もうためてるお母さんがいらっしゃるので，そういうちょっと機会を，こういうことを言ってくださいとかいう機会を与えてあげた方がいいかなとは思うんですけど。意外にうじうじと悩んでるお母さんはいらっしゃいますけどね。

・子どものことはプロだけど，親のコミュニケーションというのは，一番先生方にとってはしんどいところで，難しいと思ってらっしゃるし，でも何とか親とコミュニケーションをとりたいというところとか，その気持ちはすごいうれしいなと私も思いました。やっぱり，先生とのコミュニケーションがうまくいったときというのは子どもがすごい伸びるんですよね，もう明らかにその学習面でも生活面でも子どもの成長が見られるので。

・頑張ったことと，先生が肯定的な先生だったので，そんな否定的なことは何も。こういうことをもうちょっと家で練習してくださいということも，そういうのは電話で直接にお知らせが来たりするんですけど，ほとんど今日はこういうことを頑張りましたとか，クラスではこういうことがありましたということ，きれいな字でびっちり書いてくださる。

③　地域の人からの視点

教師の資質や能力としての，保護者とのコミュニケーションがとれることについて，地域の人々からは次のような期待が述べられていた。

・教師が生徒指導について，保護者にしっかりと説明していたら，クレームをつけるような保護者はいないと思う。実際の生徒指導は難しいとは思うが。自信を持って指導および説明をしてほしいと思う。

その一方で，学校や教師に対する要望として，次のような意見が出された。

・学問も大事だけれども，一番大事なことは，人間と人間の触れ合いである。教師の資質能力を測る際には，そういった触れ合いができるかどうかが重要になってくる。また，学校と家庭がコミュニケーションを通じて互いの役割を分担し，責任転嫁がないようにすべきである。

・子どもの目線に立ってコミュニケーションができることが重要である。ただ，親の思っていることと，教師の考えていることには大きな差があるので，何を以て子どもの目線に立って物を見ているの

かについて，掘り下げて考える必要がある。

・教師は社会を一番知らない存在であると言われるが，そういった点で，学校と地域の触れ合いの場を何らかの形で作っていくことが重要であると思う。

・学校と地域は協働関係を通じてコミュニケーションをとりかわしている。しかし，現実的には，地域から学校への一方的なコミュニケーションになりがちであるため，その点を，地域が改善していくべきではないか。

・ある小学校の校長先生が，学校を地域に開放して，まちづくりの中心役として活躍している。そういう校長先生の姿そのものが，地域と学校とが一体となっている証であり，また，そういう取り組みがあるからこそ，学校と地域のコミュニケーションもうまくいくのだと思う。

・先生自身が「子どもの規範となるような言動ができる」という側面で自信を有していると，そうした自信が地域の人とのコミュニケーションにあふれ出てくると思われる。

・教師は忙しいと思うけれども，地域にどんどん入ってもらい，地域とのコミュニケーションを図るような体制を構築すれば，生徒が非行問題を起こすことはないと思う。生徒を教育する上で，信頼関係の構築が一番大事なことだと思う。

上記の，コミュニケーションが一方向的であることを改善すべきとの意見や，学校を開放的にしてほしいとの意見などからも明らかなように，学校・教師と地域の間に双方向的なコミュニケーションを成立させることが重要であるとの見解が示されている。

なお，そうした双方向的なコミュニケーションが成立するためには，以下のような問題点を改善すべきであるという意見もみられた。

・保護者にとって，教師と話す機会が非常に少ない。この点が何よりも問題なのではないか。そういったところに，モンスターペアレントという問題を生ぜしめる隙があるのではないか。

・保護者の方も，教師が悪いと一方的に決めつけている節があり，その点には注意すべきである。

これらの指摘は，学校・教師と地域のコミュニケーションを双方向的にしていく上で，検討すべき重要な課題であるといえよう。

（3）　子どものしつけができること

① 教師による視点

「子どものしつけができる」という項目については，教師，72.7%，保護者44%で，その差は28.7%に達しており，両者の差が，質問項目の内でもっとも大きかった項目である。

教師からすると15年～20年前と違って，家庭でしつけをする数が減ったと言う。その顕著な例は，食事のしつけに現れているという。家族で食事をする機会が減り，中学生になるにしたがっ

てその傾向は一層強くなり，家庭で食事の時の身の処し方など，誰からも何も注意されない，教えられない状況があるという。

“しつけ”についてある教師は次のように説明してくれた。「学校生活を楽しくやっていくために我慢するとか，人に合わせるとか気持ちのいいコミュニケーションをとることは絶対に必要になる。電車の中でのお化粧のように社会が他者を意識しなくなっている。保護者も“めんどい”“だるい”と自分が楽ならいいと言った意識で個性とはき違えている。そうなると，やはりしつけが必要になる。学校の中で，なんでそんな態度が取れるのか，何でそんなことを平気で言えるのか，他者を意識しなくなっていることにはっとさせられます。」といった意見があった。また，「保護者の中でしつけの意識が薄まってきていると思う。」という発言もあった。

面談に応じてくれた教師の発言は，保護者や子どもの生活意識の変化，コミュニケーション能力発揮の重点の違い，教職への見方・感じ方の変化が確実に起きていることを裏付けるものであった。

また，教師の発言からは，保護者からの異議申し立てが増える中で，子どもたちが学校や集団生活で不可欠と考える“専門性の自己研鑽”，“保護者との積極的なコミュニケーション”，“子どものしつけ”が保護者や社会から軽んじられ，専門性（指導力など）や専門的な資質能力を発揮したり，研鑽したりすることへの不安や不満が伝わってくる。

今回の面談を通して，次に控える本調査について言えば，素人（保護者や地域）が玄人（教師）を一方的に評価する（日頃の不満を期待に結びつけるかたちで）ことの課題が指摘されるといえよう。教師の資質や能力については，保護者に“求める教師像”を問うだけでなく，保護者自身が子どもの生活や学習について，どのような点を大切にし，どのように育ってほしいかを問う設問も必要になろう。そこから重なりやズレを明らかにし，教師の資質能力について考察することができると考える。

② 保護者による視点

保護者の意見は，およそ以下のようになっている。しつけは，保護者にとってはしてもらってむしろ当たり前のことである。「普通に社会的なもの」とか「常識的な範囲で必要最低限」という言い方に表れているように，学校と社会を連続的に見て，あって当たり前のことだから特筆には及ばないということである。教師の意識との違いはかなりあることが予測される。

・私はしつけに関しては，親はそんなしつけなんか言わなくてもしてもらえるものと思ってるから，わざわざ学校でしつけをしますというようなことを期待はしてなくて，普通に社会的なものを学校でも同じようにしてくれればと思うのが，そこのしつけに気合いが入ってる先生の今の時代のあれがちょっとよくわからないんですけど。普通あいさつをするとか，片づけをするとか，掃除をするとか，他人を思いやるとか，言葉遣いとかというのはして当然と親は思ってるんじゃないかと，この数字を見て思ってるんですけど。しつけで先生がこんなに高い位置を占めてるというのは，わざわざ自分が

何かしつけをしなくてはと思って子供たちに接していることの方が，ちょっと私はおかしいかなと思うんですけど。当然のことですよね，しつけなんて。

・確かに保護者のランクが，そのパーセンテージが少ないのは，今おっしゃったように，言葉でしつけというものを出すというよりも，もう言ったら常識的な範囲で必要最低限あって当たり前のものだから，保護者は別にそこまでは求めてないというパーセンテージの格差が出てると思うんですけど。

③　地域の人からの視点

まず，教師の資質や能力としての，子どものしつけができることについて，地域の人々は，体罰は禁止されるべきであるが，厳しく接するべきであると述べている。

・体罰はいけないことであるが，子どものために厳しく注意することは必要である。学校生活において，そういう子どもを見つければ，毅然とした態度で指導してほしい。

・しつけのあり方は個々の家庭によって違うと思う。それゆえ，先生がしつけをきちんとすれば一本化されてしまうと思う。

・最低限のモラルについては，教師も教えたほうが良い。

・教師は，うそやいじめに対して毅然とした態度をとるべきである。

次に，保護者と教師の役割分担については，以下のような意見が出された。

・保護者こそが子どものしつけをきちんとするべきである。その上で，教師がそれを付加するという感じになるかと思う。

・教師に求められているしつけというものは，集団生活の中でのルールではないかと思われる。それに対して，親の求めるしつけは，人間性の成長である。このように，親の考えるしつけと，親が教師に対して求めるしつけは違うと思うので，そうしたギャップを埋めるためのコミュニケーションが必要である。

こうした役割分担を支える前提として，コミュニケーションが必要なのはいうまでもないことであろう。この点については，以下のような意見が出された。

・生徒指導をめぐって，先生と父兄のコミュニケーションを緊密にすることが必要であろう。

なお，上記のコミュニケーションのなかでも，とりわけ教師の側のコミュニケーション能力をめぐっては，次のような意見がみられた。

・親子間や教師と子どもの間のコミュニケーションが十分にとれていないような子どもが現在，教師として働き出すようになってきている。そのため，コミュニケーション能力が十分とれるようになったり，あるいは高まるようになるには，しばらく時間がかかるのではないかと思う。

４．おわりに

小学校教師に求められる主な資質能力３つについて，教師，保護者，地域の人から聞き取り調査を行った，その結果について要点をまとめると，おおよそ次のようである。

（1）「自らの資質や能力を高めようとすること」について

教師は，新しい教育内容や指導法に関して，自らの資質や能力を磨くことは当然の課題として認識しているが，保護者は，授業研究等よりも個別の子どもに直接かかわる能力を高めてほしいと願っている傾向がある。また，地域の人からは教師の社会勉強の必要性とともに，子どもの能力を引き出すだけでなく，教師自身の資質や能力がどの程度高まったかの評価を求める意見もあった。このように，教師と保護者と地域住民には，それぞれの立場の違いから，教員の資質能力に関しての受け止めに意見の相違が見られた。

（2）「保護者とのコミュニケーションがとれること」について

教師は，保護者としての自覚や社会的なコミュニケーション能力の低下に多くの問題があると考え，保護者は，学校からの一方的な伝達ばかり，保護者に必要がないものが多い，教師と話したくてもなかなかできないなどと感じている。また，地域の人は，教師，保護者双方のコミュニケーション能力，社会性の欠如等を指摘している。

これらのことから，学校と保護者の連携や対話，情報交換のあり方について課題があり，さらに相互の誤解が加わって，学校（教師）不信や保護者不信にもつながっているのではないか。そして，今回の調査結果にも，双方のコミュニケーションについて学校が困っていることと保護者が期待していることがそのまま表れたのではないかと思われる。

（3）「子どものしつけができること」について

教師は，子どもの「しつけ」に関して，とくに家庭教育力の低下を問題視し，保護者からは「しつけ」は教師の資質にとっては当たり前のことだから特筆すべことではない，という発言があり，受け止め方にかなりの差が見られた。また，地域の人からは，子どものしつけは家庭が基本であるが，厳しさの足りない教師の問題と学校と家庭でのしつけのあり方についての相違を考える必要があるとの意見があった。

(1) ～ (3) の３つの資質能力について，教師，保護者，地域住民それぞれの受け止め方をまとめてみると，このたびの調査目的であった「小学校教員に求められる資質能力」の考え方の三者の立場のちがいは当然ではあるが，子どもの教育にかかわる学校・家庭・地域社会の役割分担の困難さや相互連携のさまざまな問題点が，教員に求められる資質能力の認識のずれをさらに増幅してい

るのではないかと考えられる。

本研究プロジェクトは，予備調査の結果と今回の聞き取り調査で得られた知見をもとに，来年度に予定している本調査を充実させて，さらに多面的に小学校教員に求められる資質能力を明らかにすることを目的にしている。　そして，そのようにして得られた結果をさまざまな教員研修に資するとともに，これからの本学教育学部教育福祉学科のカリキュラムの編成や小学校教師を志す学生の指導に生かしていきたいと考えている。

注・引用文献

1）佐藤広志，進藤正洋，田上由雄，成田信子：「教師の資質能力に関する調査―小学校予備調査の結果分析―」関西国際大学 教育総合研究叢書 第１号 2008 年３月 63-94 頁

Abstract

Project of Research Institute for Education conducted a preliminary questionnaire inquiry on the competence and ability of teachers at kindergartens and elementary schools in fiscal year 2007. In order to further deepen the analysis, interview was made to teachers, parents and local people in fiscal year 2008.

In this paper, three competence and ability of teachers respected by elementary school teachers were focused and discussed based on the above mentioned interview.